

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520797

研究課題名(和文) 徳川儒学思想における清朝學術の受容：徂徠学以降の思想展開をめぐる新たな枠組の模索

研究課題名(英文) The Adoption of the Qing scholarship amongst Tokugawa Confucian Thought: seeking for the new framework of the intellectual trajectory after the Sorai School

研究代表者

眞壁 仁 (MAKABE, JIN)

北海道大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：30311898

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国清朝の學術移入後の徳川儒学思想の展開を分析し、学派別の思想分類を再検討して、徂徠学以降の儒学思想を捉える新たな枠組を提示しようとした。蔵書群の書誌調査をもとに、足利学校から、紀州藩、林家とその門人、昌平坂学問所に至るまでの学問方法とその内容を検証し、限られた対象を通してだが、考証学の日本における展開を位置づけた。また徂徠学以降の儒礼受容と実践についての一般化を試み、東アジアでの儒礼受容と展開の型について、独自の整理を行った。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed Tokugawa Confucian thought from the view point of the adoption of Qing scholarship. The practice of analyzing Tokugawa Confucianism history from within the framework of Inoue Tetsujiro's history of Chinese philosophy has been improved. By re-examining the Inoue's classification of philosophy, this study tried to show the new framework of intellectual trajectory after the Sorai School. In accordance with the deepening understanding of Qing scholarship, the acceptance of the methods of evidential research in textual criticism naturally resulted in the use of such techniques in critical readings of the books and historical documents themselves. This study focused on the evidential research and "eclectic" movements in Japan examined those who visited at the Ashikaga School, Japanese oldest academic institution, in the eighteenth to mid-nineteenth centuries.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：徳川儒学思想 清朝考証学 舶来漢籍

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 徳川時代をとおして唐船を介し同時代の漢籍が輸入され、幕府や諸藩の文庫にも蒐蔵されていたことが明らかになって久しい。だが、日本思想史研究の分野で長年支配的であったのは、近世日本の儒学の特徴は「鎖国体制」下の「世界的に見てもきわめてユニークな文化的な諸条件の下」で、「一国」内だけで独特な思想的展開を遂げるとの認識だった。「一国思想史」として近世日本の儒学史が論じられてきた弊害は、端的には、井上哲次郎によるドイツ思想史に範をとった学説展開史と学統派別(「程朱学派」「折衷学派」「考証学派」など)の整理を越えて、現在もなお、とりわけ徂徠学以降の儒学思想に新たな研究のパラダイムを開くことができない点に現れている。

(2) 代表的な「折衷学派」の研究である相良亨や衣笠安喜の研究は、結果的に井上哲次郎の分類をなぞる形になり、徂徠学以降の思想展開についても明清儒学移入を視野に収めていない。近年では比較思想の観点を入れた徳川政治思想史研究もあるが、思想受容の歴史的接点への関心は薄く、明清交替による思想上の位相変化と清朝学術移入後のそれらの思想展開については殆ど言及されていない。他方、清朝考証学の移入を前提とした徳川日本「考証学派」の研究は、「日本考証学を単に日本思想史の中で考えるのではなく、中国儒学史との関連を考慮に入れて考えるべきだ」という認識にもとづいて進められたが、なお非常に限られた個人を対象にした研究にとどまり、総合的に、蔵書家として知られた屋代弘賢や狩谷掖斎また市野迷庵には及ばず、彼らの考証学を継ぐとされる後の昌平坂学問所教授の塩谷宕陰や安井息軒の学問を視野に収めるものになっていない。国内外から重要性が指摘されつつも、同時代の漢籍移入を踏まえた徳川儒学思想研究としては、荻生茂博や片岡龍らの研究に留まっている。

(3) 清朝の学問、とりわけ清初儒学や考証学については、中国思想史研究の分野で、当時の儒者の「哲学から文献学へ」の関心変化を明らかにしたベンジャミン・エルマンをはじめ、地域を限定し社会史を前提にした思想史研究や、古音学(音韻学)が清朝考証学の担い手たちの中心的関心事であり、その実例検証のための学問だったとする濱口富士雄や木下鉄矢などの研究により新たな展開をみせている。さらに清朝史研究の側から、日中の学術交流史を検討する楠本賢道・水上雅晴らの研究が現れている。これらの成果を、徳川思想史研究においても消化することが求められている。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、中国清朝の学術移入後に

起こった徳川儒学思想の展開を分析し、井上哲次郎以来の学統派別思想分類を再検討して、最終的に、徂徠学以降の徳川儒学思想を捉える新たな枠組みを提示することを目指す。

(2) 既存の日本思想史研究では、各地の藩学・郷学までを含む徳川日本の儒学思想史を対象にしてきた。しかし、本研究の期間内では、あえて全国規模の儒学思想まで対象を広げない。まずは対象地域に江戸という限定を加え、幕府内で本格的に清朝学術に関心が向かう享保期の徳川吉宗周辺の儒者たちから、その後の江戸の学問界、林家の家塾や寛政期以降の昌平坂学問所の周辺儒者を取り上げる。海外学術蒐集の中心であった江戸儒学において、明朝学術から清朝学術へと儒学者の主たる関心が変わるなかで、清朝学術の移入とその影響力の波及によって、学派の括りを越えて、各移入段階に江戸儒学に共時的に現れる学問方法と思想の特徴を明らかにする。

(3) さらに本研究の期間内には、日本の享保期から天保・弘化・嘉永期までを対象期間とする。清朝は20世紀初頭まで存続するが、アヘン戦争やペリー来航により東アジアの儒学にも大きな揺らぎが起こって思想状況が一変し、分析にさらなる因子を加えなければならぬからである。

## 3. 研究の方法

(1) 清朝学術の受容という視点から、徂徠学以降の徳川儒学思想の展開に対して新たな枠組み提示を目指す本研究は、蔵書群の書誌調査をもとに、漢籍の和刻本、自筆稿本を含む文献収集して分析するという書誌研究と、蔵書蒐集・編纂出版の意図、著作から窺える学問内容・自らの学問の性格付けを書籍や諸史料から読み取り解釈する思想史研究を両軸に研究を進める。清朝の考証学自体が資料蒐集と書誌的調査を基軸とした以上、徳川儒学での受容解明においても両側面を押さえた追究方法が不可欠と考える。

(2) 文化文政年間の本格的な考証学移入以前からの、幕府周辺の江戸儒学での清朝の書籍とその思想の受容を追究すると同時に、従来、国内の地域・年代を問わずに「学統派」で分類された儒学者の思想を、清朝学術の影響の有無・その受容内容によって見直し、最終的にそれらを総合して新たな徳川儒学史の枠組みを提示する。

## 4. 研究成果

(1) 計画申請時の見通しとその検証:

研究計画として当初、漢詩文と経史学とを同時に追究した徳川中期以降の各地に散在する儒者が清朝学術の同時代的受容に積極的に取り組んでいた事例を、時系列的に、数多く検討することを想定していた。また研究

の初年度に、本プロジェクトの問題関心を示す試論を公刊し、清朝學術の徳川日本への受容についての見通しをたてた。この試論に対して、韓国の研究者からは、同時期の日韓の儒者の比較として、漢詩文と経史学の担い手に役割分担があった朝鮮に対して、両者を同時に追究した点に徳川中期以降の日本の儒者の特徴があるのではないかと示唆をうけた。実際、その方向を究めるべく最初の2年間調査を重ねた。

しかし、検討対象が多く、関心が拡散することが予想された。限られた期間で成果を生むためには、一貫した方針のもとづいてより対象を絞り込む必要があった。そのため、徂徠学以降の時期の時系列に沿って調査を進めるのではなく、清朝學術の重要著作が徳川日本に如何に受容されたのかという観点から、この研究プロジェクト全体を見直した。もっとも実証的な書誌研究として、唐船舶載本の書名を確認して、徳川日本に移入された清朝學術の側面とその性格を確定させる方法については、申請時からの変更はない。

## (2) 方法と視角上の成果：

本研究では各種の史料調査を行ったが、そのうち方法や視角上で研究基盤を築くのに有効だったのは、以下のものである。

享保年間の徳川吉宗周辺の儒者たちが、順治・康熙年間までの清朝學術移入の出発点となると考えられるため、紀州藩における校勘学の発達および明朝・清朝學術の受容について、洋装活字本に収録されていない自筆稿本や関連史料の調査し、その内容分析を行った。和歌山大学附属図書館紀州藩文庫の蔵書について書誌調査を実施し、榊原篁洲・高瀬学山から仁井田南陽・山本樂所に至る同藩藩儒の編著作を中心に、明朝から清朝へと移り変わる學術受容の実態を探った。

清朝學術を代表し乾隆・嘉慶年間に最盛期をむかえる「清朝考証学」が移入する文化・文政年間については、徳川幕府周辺の知識人たちの清朝學術受容と清朝認識について調査・研究を行った。

まず主に紅葉山文庫、昌平坂学問所、林家の旧蔵書を含む国立公文書館内閣文庫の蔵書について書誌調査を実施し、今日「清朝考証学」の古典として知られている諸作品の日本への移入時期を特定し、それらをめぐる読者の反応を検証した。

また先行研究にも導かれつつ学問所の出版物である官板刊行に関する史料および刊行本選書の過程を確認した。また一連の官板刊行を主導した林述齋ら林家と、従来日本の「考証学派」として括られてきた近藤正齋、松崎慊堂、狩谷掖齋らの清朝考証学の影響をうけた江戸の知識人の学問や文芸結社における交流が、学問所の学問や官板とどのように関係していたのかを明らかにした。

この過程で、森鷗外の史伝作品とその残存する素材にも注目し、研究上の示唆を得た。

とくに『慊堂日曆』を仔細に検討して、従来の研究で取り上げた儒者たちと江戸を拠点に松崎慊堂を囲む文人・知識人たちの知的関係を探った。

さらに、同時期に書物奉行を務めた近藤正齋が清朝の紀昀編『四庫全書提要』における漢籍分類法に従って唐船による舶来漢籍を整理していたことは知られているが、この『四庫全書提要』が江戸儒学界で漢籍蒐集と出版に果たした役割を具体的に明らかにした。

徂徠学以降の展開を、日本における儒学古典の校勘学の発達および明朝・清朝學術の受容のより広い文脈のなかで位置づけるために、徳川期以前の足利学校や徳川初期の伏見学問所の圓光寺の収集書籍や出版活動にも対象を広げた。

調査を進める過程で、「折衷学派」と「考証学派」の研究を進めるためには、足利学校関係の史料を調査し、日本の儒学古典の校勘学の発達史と清朝學術移入後の考証学の関連を確認することが不可欠であることが明らかになった。

具体的には、足利学校遺蹟図書館の蔵書および国立公文書館内閣文庫所蔵の足利学校関係史料について書誌調査を実施し、「足利学校記録」も参照しつつ、同校訪問を通して校勘学や考証学を分野で業績を遺した儒者たちの編著作を中心に足利学校蔵書との関連を検討した。とくに享保期の徂徠の弟子、山井崑崙・根本武夷・太宰春台から、「折衷学派」として括られる井上金峨・亀田鵬齋、また「考証学派」の吉田篁墩・新楽閑叟・狩谷掖齋・近藤正齋・市野迷庵、さらに安政期の森枳園・澁江抽齋に至る足利学校来訪の儒者について、視角をしばり校勘学と考証学の学問活動の実態を探った。

徂徠学以降の主な考証学者たちのほとんどが、足利学校を訪問して蔵書・史料調査を行っており、各地の史料を広範囲に調査するよりも、足利学校という機関とその蔵書群を軸に検討した方が問題状況の把握には有効であった。

2015年8月には、札幌で「徳川儒学思想における清朝學術の受容：近世以降の学問方法とその特徴から考える」と題する東アジア・ワークショップを開催し、日本と韓国から、近世中国・朝鮮思想史・文学史の専門家たちを招き、それぞれの分野での研究状況と課題を提起してもらい、各人の個別研究の成果を共有した。「儒学と詩文論における方法の推移」「文学の方法と受容の比較」「東アジアの人的交流と学問」「中世から近世への古典研究の方法」の四つのセッションを設け、中国・朝鮮・日本の近世文学と思想の「学問方法とその特徴」が、時代の推移とともにどのように変化していったのかを検討した。

## (3) 新たな知見にもとづく成果：

目的に掲げた「徂徠学以降の思想展開をめ

ぐる新たな枠組」を提示するには、漢詩文と経史学とを同時に追究した徳川中期以降の儒者が清朝學術の同時代的受容に積極的に取り組んでいた事例を数多く検証していくほかない。公刊できた成果は限られるが、研究期間内には、これまで扱った個別的で多様な主題から国際比較のなかで一般化できる枠組みを、まずは清朝學術受容について儀礼の側面から探り、儒礼の認識と実践に絞って提示した。

学会提出論文や公刊論考では、20世紀日本における儒教思想の研究史を踏まえて本研究の意義を明確にした上で、同時代の中国や朝鮮の儒礼との比較のなかで、徳川日本における儒教儀礼、とりわけ家礼や積奠儀礼の受容とその変遷を、その認識や実践の根拠となる著作にまで遡りつつ検討した。さらに徂徠学以降の儒礼受容と実践について一般化を試み、東アジアでの儒礼受容と展開の型について、儒礼の実践を「古礼」、宋礼、「時宜」に適った改変という三つの契機の調整と統合によって捉えた。神仏習合した日本仏教の強い影響を受けた日本独自の伝統と、そこでの神霊の捉え方が、積奠の実践に大きく影響していることも併せて指摘した。

#### (4) 国内外における本研究の位置づけ：

本研究プロジェクトの成果を口頭報告や提出ペーパーをとおして公表し、関係分野の研究者たちから批評を受ける機会をもった。具体的には、ソウル、トロント、ケンブリッジ、札幌で開催された国際シンポジウム、国際学会、および国際ワークショップに参加して、分科会で研究報告を行い、提出原稿をめぐって、韓国、中国、アメリカ、オランダの漢詩文や東アジア思想史研究者たちと意見交換を行い、批判を受けた。

これらを通して、蔵書と著作内容を関連づけた思想史研究は、明朝・清朝學術の受容を明らかにする上で有効であるとの確信を強めている。とくに英語圏の学会では、東アジア諸国における清朝學術の同時代的受容に積極的に焦点をあてる本プロジェクトは今後日本の学界のみならず東アジアや欧米の学界における新しい一つの研究潮流になるのではないかと指摘をうけている。

書誌研究と思想史研究とを結びつけ、明朝・清朝學術の受容という視点から、徳川儒学思想の展開に対して新たな枠組み提示を目指す研究は、国際的にも意義があるであろう。

#### (5) 今後の展望と課題：

本研究で足利学校にまで対象を拡げた結果、考証学を同時代的な外来の思想と方法の受容だけでなく、それ以前より日本儒学史で行われていた校勘学の文脈の中で捉えるための手がかりがつかめた。

しかし、国際比較という点から本研究を総括する過程で、結果的には、儒学思想とその

学問方法の検討だけに限定するのではなく、中世以来のより広い学問や実践の伝統のもとで検討するという新たな課題が与えられた。比較のなかで捉えた場合、近世日本の文献学的な校勘・考証・考拠は、清朝學術の移入だけではなく、儒学よりもむしろ国学における文献学的な研究、さらにその重要な根拠として中世の仏典研究における悉曇学の影響のもとで位置づける必要がある。

もっとも、複数の時代や専門分野をまたぐ必要があるため、これらの課題を単独で行うには限界がある。今後、未だ十分に公刊できていない本研究の成果を順次発表していくとともに、他の研究者の協力を得て、分野の壁を越えた総合研究として、校勘・考証・考拠の学をめぐる議論を発展させていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

眞壁仁、神の宿るところ：徳川後期の積奠における送迎神と神像、『學士會報』、査読なし、第915号、2015年11月、53-62頁

眞壁仁、大学出版の源流：「官板」から「福澤氏蔵版」まで、『大学出版』、査読なし、第94号、2013年、2-6頁

眞壁仁、徳川儒学思想における明清交替：江戸儒学界における正統の転位とその変遷、『北大法学論集』、査読なし、第62巻第6号、2012年、43-102頁

眞壁仁、明清交替と18世紀日本学术界の知の集積、『第13回奎章閣国際シンポジウム：18世紀東アジアにおける知識集成』ソウル大学奎章閣韓国研究所、査読なし、2011年、37-73頁

〔学会発表〕(計6件)

眞壁仁、明清交替後の江戸儒学界：校勘・輯佚・考拠学とその精神、ワークショップ徳川日本における東アジアの學術受容、2015年8月10日、北海道大学(北海道札幌市)

眞壁仁、神の憑依するところ：昌平黌積奠改革と徳川日本の儒礼受容、丸山眞男研究第9回プロジェクト研究会、2015年2月13日、東京女子大学(東京都杉並区)

眞壁仁、日本における儒礼の受容と展開：昌平黌の積奠改革をめぐって、国際シンポジウム Cultural Heritage in Religion: Its Meaning and Preservation、2014年10月10日、ケンブリッジ(アメリカ合衆国)

眞壁仁、昌平黌の積奠改革：「神」の位格をめぐって、宗教遺産学研究会、2014年5月10日、京都大学(京都府京都市)

MAKABE, Jin. “Scholarship and state in Qing-Tokugawa relations,” for the panel “Chinese Learning and Japanese Power: Rationalism, Knowledge and the State in nineteenth century Japan”, Annual Conference of the Association for Asian Studies, 2012年3月15日、Toronto (Canada)

眞壁仁、明清交替と18世紀日本学術界の知の集積、第13回奎章閣国際シンポジウム：18世紀東アジアにおける知識集成、2011年7月21日、ソウル（韓国）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

眞壁 仁 (MAKABE, Jin)

北海道大学・法学研究科・教授

研究者番号：30311898